

大作曲家達の最後の作品を集めて 第2回

プログラム

大作曲家達の最後の作品を集めての特集、今日はその第2回目をお送りします。

ブラームスの作品119の「4つのピアノ小品」は、1892年作の最後のピアノ作品。クララ・シューマンのために作曲、クララが“悲しくやさしい”と評した第1曲。美しく気品に溢れた中間部が印象的な第2曲。短いスケルツォ風の第3曲。そして第4曲は最後の作品にふさわしい堂々たるスケールで締めくくっています。シベリウスの交響詩「タピオラ」は、1925年、自らの生誕60周年記念行事のために依頼され作曲された、事実上残された最後の作品となりました。「タピオラ」とはフィンランドの大叙事詩「カレワラ」に出て来る森の神の事で、母国の象徴である森を表現したシベリウス最後の傑作と評価されています。「トゥーランドット」はプッチーニ最期のオペラですが、リユーの死までで未完に終わり、イタリアの作曲家アルファーノが草稿に基づいて完成させました。異国情緒に溢れ、壮大な構想と音楽的スケールは、圧倒的な存在感を示しています。ドビュッシーのヴァイオリン・ソナタは1916年から1917年にかけて作曲され完成させた最後の作品。1917年5月5日ガストン・プーレのヴァイオリンに作曲者自身のピアノ伴奏で初演、妻のエマ・ドビュッシーに献呈されました。スペイン風の色彩と幻想性を持った近代ヴァイオリン・ソナタの傑作のひとつ。マーラーの交響曲第10番は1910年に作曲に着手、1911年第1楽章のアダージョのみを完成させてマーラーはこの世を去りました。無調に近い響き、極度の不協和音も用いられていますが、死へのあきらめ、憎悪、晩年に危機を迎えた妻アルマへの愛など、不安定な中にも恐ろしい叫びが聞こえて来るような、マーラーがたどり着いた最後の感情表現音楽と言えるかも知れません。今日では大まかなスケッチが残された第2楽章から第5楽章までをイギリスの音楽学者デリック・クックが補筆完成させた版が広く知られています。

ヨハネス・ブラームス (1833~1897):

4つのピアノ小品 OP.119

1. 間奏曲短調 2. 間奏曲ホ短調 3. 間奏曲ハ長調 4. ラフソティ変ホ長調

マウリツィオ・ポリーニ(ピアノ)

(1989.8.22 サルツブルク祝祭大劇場でのLive)

ジャン・シベリウス (1865~1957):

交響詩“タピオラ” OP.112

エサ・ベツカ・サロネン指揮スウェーデン放送交響楽団

(1990.3.2 ストックホルム、ベルワルド・ホールでのLive)

ジャコモ・プッチーニ (1858~1924):

歌劇“トゥーランドット” ~

第1幕“お聞きください王子様”(リユー)―泣くなリユー(カラフ)―三重唱(カラフ、リユー、ティムール)

第2幕“この城の中で”(トゥーランドット)―第3幕“誰も寝てはならぬ”(カラフ)―フィナーレ

マリア・グレギーナ(ソプラノ=トゥーランドット)/マルチエロ・ジオルダーニ(テノール=カラフ)

マリーナ・ポプフラスカヤ(ソプラノ=リユー)/サミュエル・レイミー(バリトン=ティムール)

アンドリス・ネルソンス指揮メトロポリタン歌劇場管弦楽団&合唱団

(2009.11.7 メトロポリタン歌劇場劇場でのLive)

歌劇“トゥーランドット” ~ 第3幕“誰も寝てはならぬ”

ルチアーノ・パヴァロッティ(テノール)/ジョン・ウストマン(ピアノ)

(1985.8.7 サルツブルク祝祭大劇場でのLive)

*** 休憩 ***

クロード・ドビュッシー (1862~1918)

ヴァイオリン・ソナタ短調

オーギュスタン・デュメイ(ヴァイオリン)/マリア・ジョアン・ピリス(ピアノ)

(1992.10.3 ピラールラピルのロマネスク教会でのLive)

グスタフ・マーラー (1860~1911):

交響曲第10番嬰ハ短調“アダージョ”

クラウス・テンシユテット指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

(1982.8.29 サルツブルク祝祭大劇場でのLive)